2 Jp-12　　調理済み・半調理済み食品の利用実態
－１９８４、１９９０、１９９４年の変化－

広島中央女短大　○大下市子　　大阪成蹊女短大　山本友江
山口女大家政　　足立蓉子

目的　近年、家庭における食生活の状況も大きく変化している。食生活の変化を知る指標の一つとして調理済み・半調理済み食品の利用について、調査対象者を40、50歳代の主婦に絞り、1984、1990、1994年の３時点でアンケート調査を行った。

方法　調査時期：1984、1990、1994年６～７月　調査対象者：大阪府吹田市周辺、広島市周辺、山口県在住の40、50歳代主婦　調査項目：生活概況、食事状況、調理済み・半調理済み食品（惣菜15種、冷凍食品10種、レトルト食品５種、インスタント食品４種、持ち帰り食品５種、配達(ﾃﾞﾘﾊﾞﾘｰ)食品１種、電子レンジ専用食品２種　合計42種、1984年については合計30種）の利用　有効回答数（回収率%）：1984年445部（69.0%）、1990年594部（63.6%）、1994年511部（64.0%）

結果　1984、90、94年の３時点で調査を行った30種の食品の中で、利用の変化がないのは持ち帰り寿司・冷凍ハンバーグ・インスタントスープの３種であった。84-90年の利用が増加している食品は、惣菜肉類・冷凍餃子・冷凍ハンバーグ・持ち帰りハンバーガー等の洋風の食品が多かった。一方、90-94年に利用が増加している食品は、惣菜きんぴら・惣菜酢の物・惣菜煮しめ等の和風の食品が多かった。また、90年調査時からの追加食品（12種）のうち９種は、利用率の増加が認められた。

さらにこれらの食品の利用について、生活概況（居住地域・就業の有無・世帯形態等）、食事状況（調理時間・外食状況等）の影響を検討した。